

『メンタル・コーパス』

ジョン・R・テイラー著, 西村義樹, 平沢慎也, 長谷川明香, 大堀壽夫(編訳), 2017年, くろしお出版, 東京.

最近の大学“改革”の困ったことの一つとして教員の業績評価というのがあります。大学という知的な営みに企業の論理を無理矢理押し込んで象牙の塔に“風穴”を開けるという論理です。でも、どれだけ優れた教育を行っているか、どれだけ優れた研究を行っているかなんて、正直、評価しようがありませんよね。だって、学生が無意味な授業とっていたものが、知らず知らずのうちに醸成し、10年後・20年後に生きてくることはありますし、[白川静](#)先生のように現役時代に行った研究が定年退職後に開花する例だってたくさんあるわけですから。客観的な評価なんてありえません。

そんな“客観的な評価”の中で明らかに過小評価されているのが、翻訳というお仕事です。英語の授業で日々繰り返される「自分なりに訳してみました,..」的な訳ならいざ知らず、まじめに高度な内容を理解し、誤解のない自然な日本語に直す専門書の翻訳作業は、知的な実力は言うに及ばず、誠実さや責任感まで求められるまさに職人の仕事です。しかもその翻訳が与える知的なインパクトは計り知れず、ときには日本の学問地図を書き換えるほどの凄まじい力を持っているのです。それにもかかわらず、翻訳がこれほど評価されていないのは本当に残念なことです。

このような逆風に逆らいながら、本書は素晴らしい翻訳チームを得、彼らの献身的な努力によって素晴らしい研究書に仕上がっています。新しい文を無限に生成する人間の言語能力は自律的な規則や制約の体系だと(疑ってみることもなく)信じ込んでいる人に対し、実際に使用された膨大な言語表現を統計学習していくことによってそのような能力が発現するのだと著者は説きます。少なくとも、従来の文生成のモデルとは全く異なったメカニズムを想定することによって、そのような言語能力を解明しようという試みがあることだけでもぜひ知っておいてください。

それから、イメージスキーマを使って文法の意味的動機づけを教えるという英語の先生、僕もそのように教えていますが、本当にそのようなやり方で生徒(学生)の英語力は伸びるのでしょうか。無味乾燥な文法の暗記を生徒や学生に押し付ける授業のやり方からみると、このような教え方は正しい方向を向いていると思います。ただ、認知言語学の研究成果はこれだけではないのです。本書で紹介されている用法基盤モデル(Usage-based Model)は、言語そのものの性質を考えるうえでコペルニクス的なインパクトを与えてきました。本書はこのようなまじめで熱心な英語の先生たちにも反省を促すでしょうね。明日の授業の組み立て方を見直してみましよう。

最後に、これは蛇足ですが、もし本書を読んだ後で、それでもやはり「認知言語学は文の生成能力を説明しようとする気がない。というか、そういう問題意識すらない。」という不満をお持ちの方がいらっしゃいましたら、本書と合わせて Langacker (1999) ‘A Dynamic Usage-based Model’ と ‘Conceptual Grouping and Constituency’ (ともに、*Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter に収録) をお読みすることを強くお勧めします。もちろんそれでも納得しないかもしれませんが。(文責:町田章 2017年8月31日)